



FOCUS

米国中間選挙のジレンマ

上院は民主党が多数を維持、下院は共和党が奪還。

「ねじれ状態」が復活した議会だが、

共和党への雪崩現象「赤い波」は起こらなかった。

スイング・ステートやラストベルトの人々はどう一票を投じたか、

強力な権限を持つ議会は「ねじれ」でどうなるか、

そして早々に次期大統領選立候補を表明したトランプ氏の影響は、

現地報告

中間選挙で

有権者が選んだもの



11月15日、当選した下院議員たちが集まって議事堂前で記念撮影。ここは2021年1月の議会乱入事件の舞台でもあった（AP／アフロ）

インフレなど経済状況が悪化する中での中選挙、候補者は身近で実利的な論点を取り上げ、支持を訴えた。それに反応する市民もいる一方で「分断」は石のように固まってきている。選挙取材で垣間見たアメリカ人の素顔は。

読売新聞アメリカ総局長 中島健太郎

なかじま けんたろう 上智大学卒、
一九九七年読売新聞社入社。ソウル支局
長、政治部次長などを経て二〇一九年九
月から現職。

一月八日に投票された米国の中間選挙は、野党共和党に優勢とみられた事前予想を覆す大接戦となった。郵便投票の増加で投票用紙の確認や集計に時間がかかったこと

もあり、上院で民主党の多数派獲得が決まったのは選挙から四日後の一二日。一週間以上経った一六日になり、ようやく共和党が下院で多数を奪還する見通しとなった。上院

の議席数は一二月に決選投票が行われるジョージア州を除き、民主党五〇、共和党四九。下院での議席数も僅差となるのは確実だ。

一五日夜、フロリダ州パームビーチのトランプ前大統領の邸宅「マール・ア・ラーゴ」は、熱気に包まれていた。支持者や報道陣でごったがえすなか、トランプ氏は約一時

間にわたって演説した。「米国を再び偉大で栄光ある国にするために、私は今夜、米大統領選への出馬を宣言する」。トランプ氏がこう強調すると、会場は歓声に沸いた。

トランプ氏は、中間選挙で予想された共和党の圧勝を自身の成果とアピールするつもりだったようだが、支持候補は知事選や上院選で敗北が目立った。党内にはフロリダ州知事選で圧勝したロス・デサントイス氏ら大統領有力候補も台頭しており、トランプ氏にとっては、思惑が外れた中での出馬表明となった。

インフレス「暴風」の中での選挙戦

事前の共和党優勢を覆し、民主党が踏みとどまった理由はどこにあるのか。選挙戦最後の週末となった十一月四～六日の北東部ペンシルベニア州での取材を参考に考えてみたい。ペンシルベニア州は、二〇一六年大統領選でトランプ氏、二〇年大統領選で民主党のバイデン大統領が勝利した典型的な「スイング・ステート（揺れる州）」だ。

下院のペンシルベニア州第八選挙区は、バイデン氏の出身地のスクラントンなどアパラチア山脈の谷沿いに点々と都市が広がる。一九世紀後半に炭鉱業で栄え、今はニューヨークに近い地の利を生かした物流関連が主な産業だ。

第八選挙区の候補者は、民主党現職のマット・カートライト氏と共和党新人のジム・ボグネット氏。カートライト氏は六選を目指すベテラン議員で、下院歳出委員会などに所属する有力者だ。ボグネット氏は、トランプ前政権時代に政府の役職に就き、トランプ氏の推薦を受けていることを強くアピールする選挙戦を展開した。

有権者の八割は白人で、スクラントンなどの都市部は民主党、周辺の郊外は共和党支持者が多い。二〇二〇年選挙はカートライト氏が約一万二〇〇〇票差で勝利したが、大統領選の選挙区単位での得票はトランプ氏がバイデン氏を上回った。今回の選挙で、カートライト氏は約六六〇〇票差で逃げ切って勝利した。

ボグネット氏は、徹底してトランプ氏との近さを強調していた。九月には、選挙区内でトランプ氏や上院、知事候補らとともに、大規模な集会を開いた。カートライト氏とバイデン氏が一心同体だと主張し、ガソリンなどの物価上昇を争点に掲げた。

選挙区内には、複雑に入り組んだアパラチア山脈の谷に沿って、小さな町が点在する。カートライト氏が六日夜に訪れたのは、スクラントン郊外のジャーミンという町だった。地元の市長や党委員会関係者らの集会で、最後のお願



有権者との小規模集会で「共和党が民主主義を奪おうとしている」と訴えるマット・カートライト下院議員（11月6日、ペンシルベニア州ジャーマンで。撮影・筆者）

いに回っていた。一日に何か所も小規模集会を重ねる選挙戦は、徹底的なドブ板選挙だ。

「われわれが今、目にはしているのは、二つの要因によるインフレだ。まず一つ目、巨大な石油産業。二つ目は国際物流企業。恥ずかしげもなく、価格を二〇倍にした。冗談じゃ

ない。四年前は二五〇〇ドルだったコンテナの運送料が今じゃ二万五〇〇〇ドル。これは、海賊みたいな行為だ」。

カートライト氏が演説で、まず取り上げたのは、有権者の関心が高いインフレだった。記録的な水準のインフレが続いている中で、民主党が議会で単独で通過させたインフレ削減法案などの成果をアピールした。続いて民主党支持者の関心が高い人工妊娠中絶の問題に触れた。

「民主党は、人々のための党。もう一つの党は『政治のための党だ。ただ、権力だけを追い求めている。その権力で何をするのか。女性の権利を奪おうとしている。それだけじゃない。年金も医療保険（メディケア）もだ」。

最後に強調したのは、民主党が選挙戦で訴えた「民主主義の危機」という争点だった。

「彼ら（共和党）は、米国の民主主義を奪おうとしている。誰をペンシルベニアの知事にしようとしているか知っているか。大統領選の選挙結果を認めないと公言する州務長官候補もいる。民主主義に反する事態で、何としても阻止しなければならぬ」。

集会を終えたカートライト氏に話を聞いた。〈米国はいい方向に向かっているか。悪い方向に向かっていると思うか〉という質問に、少し考えてから次のように答えた。



犯罪やインフレの問題を中心に訴えた、共和党のメフメト・オズ候補（11月4日、ペンシルベニア州ウェクスフォードで 撮影・筆者）

「その質問に確固とした答えはないと思う。米国の一方はひどくて、非難されるべき方向に当たっていて、もう一方は道徳的で意味のある方向に当たっている。だから、我々は前者でなく、後者を称賛し、悪い方向に行こうとしている人々を説得しないといけないのではないか」。

同じ顔ぶれによる対決となった二〇二〇年の票差は三・六ポイントだったが、今回は二・四ポイント差に縮まった。インフレという逆風の中で、かろうじて民主党現職が逃げ切った結果は、今回の選挙戦を象徴するものと言っていだろう。

共和党穏健派候補者、主張のバランスに腐心

ペンシルベニア州では最終盤の十一月五日、民主党のバイデン大統領とオバマ元大統領が最大都市のフィラデルフィアにあるテンプル大学で演説したほか、トランプ前大統領も同じ日にピッツバーグ郊外のラトロープで集会を開くなど、与野党が力を入れた州だ。

今回の中間選挙で、州全体での争いとなる上院選と知事選は、民主党が勝利した。上院選は、ジョン・フェターマン副知事がテレビ司会者のメフメト・オズ氏を破り、知事選は州司法長官のジョシュ・シャピロ氏が州議会上院議員のダグ・マストリアーノ氏を破った。

注目されるのは、その票差だ。上院選は二七三万票対二四八万票で四・八ポイント差だったのに対し、知事選は三〇一万票対二三万票で一四・六ポイントの差がついた。共和党に投票した人の中で、上院選ではオズ氏に投票し、

知事選でシャピロ氏に入れた人が多かったことを示す。

その理由は、候補者の質に差があったためだと言えるだろう。元陸軍大佐のマストリアーノ氏は二〇年大統領選でトランプ氏の敗北を認めず、選挙が盗まれたと主張する選挙否定論者だ。二一年一月の連邦議会襲撃事件の現場にもいた。そしてトランプ氏の推薦で五月の予備選を勝ち上がった。

オズ氏は医師で、人気テレビ番組の司会者としても名前が知られた有名人だ。トランプ氏の推薦は受けたが、選挙結果を否定する主張には同調しなかった。選挙戦終盤は「議会にバランス感覚をもたらす」とする主張を掲げ、穏健派の取り込みを図った。

オズ氏が重視したのは、共和党支持者が重視する争点の、インフレと犯罪の問題だった。ペンシルベニア州第二の都市、ピッツバーグ郊外にあるウエクスフォードで四日に行われた集会での演説では、こう訴えていた。

「まず経済。バイデンの消費拡大策が事態を悪化させているのは明らかだ。次に犯罪。(対立候補の)フェターマンは、殺人事件での終身刑をなくしたいと思っているようだ。三番目は(薬物の)フェンタニルの問題。違法薬物を合法化すれば、殺人発生率は上昇する。これは大問題だ」。

CNNなどの出口調査によると、ペンシルベニア州で共和党支持者が重視した争点は、インフレが七二%、犯罪が四九%と高かった。オズ氏は、共和党支持者の重視する問題を中心に訴えていた。

今回の選挙で、オズ氏のような共和党穏健派候補のジレンマは、トランプ氏の強固な支持者を敵に回せば支持層を固められず、選挙結果の否定などの極端な主張をすれば、無党派層に支持が広がらなかった点だ。出口調査では、ペンシルベニア州でトランプ氏を「好ましい」と思う人は全体の四〇%に上った。

ペンシルベニアのように以前は製造業が栄えていたラストベルトの白人で、大卒でない労働者層を中心としたトランプ氏の岩盤支持層は今も揺るぎがない。オズ氏の集会に参加していた住宅修理事業ジョン・パーシックさん(三三)はその典型だ。特に重視したのは、インフレだという。

インフレの責任がバイデン大統領にあるかどうかを尋ねると、こう答えた。「当たり前だ。新型コロナウイルスの感染が広まるなかで、働いてもいない人にカネをばらまいた。俺は毎日働いているのだ。それで稼いだカネは今、二年前よりも価値がなくなっている。ガソリンなんて倍になった」。一人当たり最大一四〇〇ドルの現金給付などの経済対策



トランプ前大統領を今も熱烈に支持するジョン・パーシックさん（11月4日、ペンシルベニア州ウェクスフォードで 撮影・筆者）

は、労働者層に不公平であるとの主張だ。

バイデン政権が行った政策の中で、特にパーシックさんが不満なのが、八月に発表された学生ローンの減免策だという。大学の授業料について一人当たり最大で一万ドルの返済を免除するもので、中間選挙に向けたばらまきとの

批判もあった。「なぜ他人の子どもの学費を払わないといけないんだ。行きたいから大学に行ったはず。俺たちに責任はない。本当におかしい」と憤っていた。

トランプ氏については、「今でも本当にファンタスティックな大統領だったと思う。選挙に出るなら、また投票する」と言い切った。白人労働者層の多い州において、トランプ氏への支持は今もきわめて根強い。

アイデンティティへの意識が対決姿勢となる？

民主党のバイデン現大統領が共和党のトランプ前大統領に勝利した二〇年大統領選は、ペンシルベニア、ウイスコニン、アリゾナ、ジョージアといった接戦州が全体の勝敗を決めた。特にアリゾナとジョージア両州は、長年の共和党の地盤を民主党が制し、バイデン氏勝利の大きな要因となった。

中間選挙での上院選と前回大統領選の結果を民主、共和両党で比較してみると、接戦州の結果はほとんど変わりが無い。大統領選でバイデン氏が〇：六ポイント差でトランプ氏を破ったウイスコニン州では今回、共和党現職が一〇ポイント差で勝利した。ジョージア州は、一二月の決選投票に結果の確定が持ち越された。

歴史的なインフレが起き、バイデン氏の支持率は四割前後を低迷したにもかかわらず、有権者の投票行動は、ほとんど変化がみられなかった。米国の有権者は、リベラルの民主、保守の共和両党にはつきりと二分されたままであることが改めて浮き彫りとなった。

カリフォルニア大学ロサンゼルス校准教授で、前回大統領選の結果を分析した『苦い結末二〇二〇年大統領選と米国民主義の課題』を九月に出版したクリス・タウサノビッチ氏は、米国の有権者の支持が真つ二つに割れ、ほとんど変化がない状況を投票行動の「石灰化 (calcification)」と呼んでいる。

タウサノビッチ氏によると、有権者の支持が二分し「石灰化」した理由として、いくつかの要因が考えられるという。一つは、一九七〇年代以降に米国政治で進んだ二極化の帰結だという点だ。北東部のリベラルな共和党議員、南部の保守的な民主党議員が消滅し、共和党は保守、民主党はリベラルという色分けがはっきりした。

もう一つの要因は、初の黒人大統領であるオバマ大統領の登場で、有権者が人種とアイデンティティの問題を強く意識し始めたことだという。続いて、トランプ氏がラストベルトなどの白人労働者層と東・西海岸のエリート層の対

立を強調し、「われわれ (us) 対彼ら (them)」という極端にアイデンティティを意識した選挙を行った。価値観の問題がからみ、対立は緊張含みとなった。

次期大統領選に向けた見通しについて、タウサノビッチ氏は「民主、共和両党ともに主張を変える理由が見当たらない。双方ともに勝利できると思っており、勝つためには手段を選ばないだろう」と語っている。

二極化が進んだ米国の選挙は、ごく一部の浮動票が動くことで、全体の結果が左右される。共和党優勢の情勢が最終盤で覆ったのは、トランプ氏の影響力が強まる共和党の勝利に危機感を覚えた若年層を中心とした票が民主党に流れたためと考えられる。事前に共和党有利という報道がなければ、予想通りの共和党圧勝でトランプ氏が勢いに乗った展開もあり得たはずだ。

二極化が固定化するなか、共和党は保守、民主党はリベラルの支持層を掘り起こすしか、党勢拡大の手段がないと考えている。民主党は民主主義の危機、共和党は白人労働者層の苦境を訴えることで得票に結びつける選挙戦術から抜け出せない。その結果、社会の分断の先鋭化がさらに進行しているのが、次の大統領選に向けた米国の現状だと見える。●